

myらいふ

● 紙面のご案内 ●

140号

17P：第8回かぬま市民協働まつり

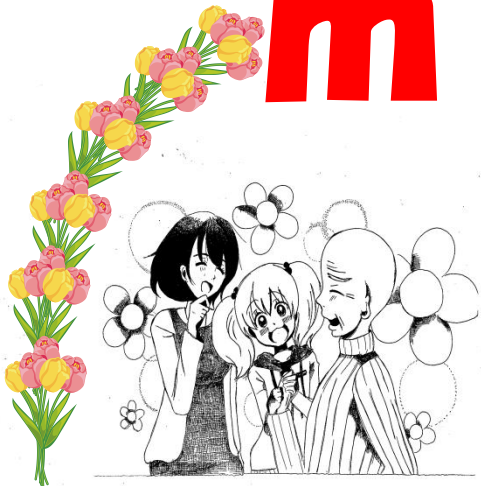
18P：文化センター「スクラップブック教室」

19P：花木センター「手のり盆栽教室」

ウィークエンド体験「まちなか探検」

20P：環境講演会

1985.4.25～



myらいふは、市民編集員が取材・編集する生涯学習情報紙です。

「見てよし、やってよし。協働まつり」

3月9日（日）に第8回かぬま市民協働まつり「いってみっぺ！！やってみっぺ！！」取材しました。

まちなか交流プラザとその周辺に所狭しとブースやお店が並び、ステージは野外を入れて3つと、大幅に規模が拡大されてこれまでにない賑わいぶり、10時の開始直後にはすでに大勢の人でごった返していました。

実行委員長の豊嶋渉さんにお話を伺いました。

「今回は若い世代が積極的に関わってくれたことで、大人たちが大いに刺激を受けたと思います。いろんな年代や立場の人がたくさん集まったんですが、意思の疎通がうまくいったためか、ごちゃごちゃになるどころかむしろ役割分担が明確になり、前日の準備はびっくりするくらいスムーズに進みました。また、4大新企画として①ツイキャス生放送②市民活弁レシピコンテスト③まち歩きツアー④協働まつりオリジナルソング発表など、新しく試みました」



委員長の言葉どおり、制服姿の高校生や若いスタッフを多く見かけました。『高校生まち変プロジェクト会議』のメンバーや鹿沼南高校の生徒たちがそれぞれ店を出していた他にも、案内・ステージ司会進行・ツイキャス生放送番組などで、高校生が大活躍。

出店数は50を超え、ステージの方も、開催当初から盛り上げてきている、よさこい・空手・ベリーダンスの他に、これまであまり目にしたことがなかった、民謡・マジック・パドル体操など本当に盛りだくさんでした。

普段『ふらっと』を通じて市民活動をしている方たちの発表の場であり、交流の場として始まったこのイベントですが、行政やスタッフ、参加者が、多角的に絶妙なバランスを保って「協働（共に働きかけ、つくりあげる）」しているのを強く感じ、なにより、その場にいた方たちのはじけるような笑顔が心に残る素敵なイベントでした。



写真を宝物にかえる魔法「スクラップブック」

スクラップブックを知っていますか？写真を、美しくデザインしながら貼っていく工作とでも言うのでしょうか。最近では文具売り場などにも専用の道具が並んでいるのをよく見かけます。そのスクラップブックの教室取材しました。

2月17日（月）市民文化センターの和室に入ると、既に作業が始まっていました。大きなテーブルに受講生が向かいあい、横のテーブルにはカッティング機、文字や模様を打ちぬくパンチ、様々な模様の紙などの素材が所狭しと置いてあります。



講師は菊池有美先生で受講生は7名でした。今回は2回目ということもあり、講師は作業を見守るという感じで教室は進んでいきます。5回を1コースとして、5ページ分を作るように設定しているということでしたが、人によっては2ページを見開きで作るなど、それぞれのやり方で作業を進めていました。写真を選定し、形と大きさを決めて切り抜いたり、先生が用意した素材を使って飾ってゆき、1時間も過ぎた頃には真っ白だったアルバムのページが華やかに彩られていました。



今はデジタルで場所をとらずに写真を残すことが多いですが、撮りっぱなしになってしまうこともしばしば。お気に入りの写真をプリントして、台紙に飾り、コメントを添えることにより、思い出がより鮮明に心に残ります。受講生の、写真に写っている人や物への愛情をたっぷり感じることができました。

スクラップブック歴10年の講師も「必ずコメントを書きます。そうすることで、何度も見返すものになるので。この時の思いを子どもたちに伝えたいという気持ちで始め、この楽しさを皆さんに伝えたいと5年前から教室を開いています」とのこと。作る人の思いが伝わるスクラップブック、写真が宝物になる魔法のようでした。





誰でも簡単に!! 「手のり盆栽教室」



「手のり盆栽教室」が2月23日(日)に花木センターにて行われました。講師は沼尾勝巳さん。参加者は男女合わせて7名でした。

手のり盆栽とは文字通り手の平にのるサイズのもので、通常の盆栽とは異なり、根が大きくならないように工夫をしています。

今回は松とコトネアスター(南天のような赤い実をつけた木)のどちらかを選びます。



まずはじめに根を削り取る作業をします。そのままだと大きく成長してしまうので太い根をとり細い根だけにしていきます。

次に幹の部分に針金を巻いて自分の気に入った形を作り出します。針金にも太いものから細いものまであって、幹の3分の1の太さのものを選ぶそうです。

そして鉢に肥料を入れ、根腐れ防止のための細かい炭を入れたあと、粒状の土を入れて植え込みます。最後に苔を貼り付けて出来上がりです。思い思いの手のり盆栽ができて皆さん幸せそうでした。



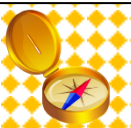
受講生の方に「手のり盆栽の魅力は何ですか?」と尋ねると、「すぐ飾れて、扱いが簡単なところ。これで10個目になります」と笑顔で答えてくれました。



花木センターの講座は月1回、第4日曜日に行っているそうです。興味のある方はぜひ参加してみたいはいかがでしょうか。



おひな様めぐりでまちなか探検



2月22日(土)、生涯学習課主催のウィークエンド体験「まちなか探検」に参加しました。今回の講座は、市内で開催されている「おひな様めぐり」をしながら、まちなかを歩いて探検するというものでした。

今年で5年目を迎える「おひな様めぐり」とは、2月から3月にかけて鹿沼市内中心部の公共施設やご家庭、お店など約70ヶ所以上に色々なおひな様が展示され、配布されている詳しいマップを見ながら自由に見学する事が出来るイベントです。

当日は、二週続きの大雪がまだところどころ残る中、久しぶりの晴天に恵まれ、春の訪れを思わせる暖かい日となりました。小学生女子6名が参加、8名のボランティアの方達が子ども達の引率を手伝って下さいました。



集合場所の鹿沼市民情報センターをスタートし、マップの中から選んだ3ヶ所(屋台のまち中央公園→まちなかの駅新鹿沼宿→神山園)を目的地に約2時間の散策へ。一つ目の屋台のまち中央公園では隣接する「掬翠園」を訪れ、最近のものから大正時代までの段飾りのおひな様を歴史を追って見る事が出来ました。また今年最も充実の「つるし雛」は部屋中に溢れんばかりで大変見ごたえがありました。次に訪れた「まちなかの駅」では木製のおひな様が豊富で、大正、明治、江戸時代とかなり古いものが展示されていました。最後におじゃました「神山園」ではご家庭で大切にされてきた100年も前のおひな様を見せて頂きました。



途中の所々でも鉄製やガラス製など珍しい素材や形の色々なおひな様を発見。どのおひな様もそれぞれに個性があり、その都度マップや説明書を興味深く読みながら、子どもも大人も真剣に見入っていました。また、「つるし雛」の作り方を教えていたお店もありました。

鹿沼の街に歴史や風情あるおひな様がこんなに数多くある事に驚きでしたが、今回「おひな様めぐり」をしながらまちなか探検をして、鹿沼の街の今まで知らなかった新たな発見が出来たように思います。



「森林には人を癒す力がある」^{いや}

環境講演会で今井氏提唱。



鹿沼市環境活動推進会議などが主催の「環境講演会」が、去る2月8日（土）鹿沼市民文化センター小ホールで開催されました。この講演会は市民の環境意識の啓蒙向上を目的に平成9年から始まって今回が12回目となります。

第1部は市長挨拶などの開会セレモニーに続いて「かめまエコライフモニター」表彰式が行われ、3名の優秀者が表彰されました。

第2部の環境活動事例発表は、宇都宮市の企業による「メガソーラー事業への取り組み」。栃木県内4カ所に建設した太陽光発電施設のうち、鹿沼市磯町の「鹿沼ソーラーファーム」のケースをわかりやすく説明していただきました。

そして第3部は登山家で医師の今井通子氏による「スローライフ私流～登山から学ぶ地球環境～」という講演です。お話はまずご自身の登山経歴や登山の歴史などから始まり、次に温暖化などによる地球環境の変化や汚染、そして環境意識の高まりに伴う保護活動へと進んでいきます。終盤には医師としての知識を生かして、森林や自然環境を健康や医療に活用する取り組みを紹介されました。例えば森の散策は、ストレス低減や高血圧低血圧どちらにも良い効果が証明されるなど、「森林医学」や「森林セラピー」と名付けて研究されているそうです。



講演終了後に60代の主婦に感想をうかがうことができました。「エコライフモニターの表彰では簡単にでも受賞内容の紹介があると、もっとよかった。メガソーラーの話は、栃木県が太陽光発電の適地ということなので、地元での事業の発展に期待したい。今井さんの講演では、森林などの自然が持つ治癒力にあらためて感心した。また、私たちの日常生活における環境への姿勢を的確に示してくださりととても良かった」とのことです。

当日は大雪警報も出された厳しい気象条件。そんな中での来場者は、環境意識の高い方が多かったのではないのでしょうか。

編集後記

ソチオリンピック、フィギュアスケートでの浅田選手のフリーの演技は感動的でしたね。人は絶望のどん底から立ち直り偉業を成し遂げることができるということを真央ちゃんは証明してくれました。あきらめない心、くじけない心を持つことの大切さを教えてくれました。晴れ渡った青空の下を散歩していたら、私も何か新しいことにチャレンジしたくなりました。

介川恭子